

インド外交を悩ませる中国

——伝統的バランス外交は変わるか

陸上国境において、インド洋において、そしてユーラシアという空間において、インド外交は中国と衝突し、懸案を抱えている。現状変更を辞さない中国の存在は、全方位にバランスを重視するインド外交の伝統的なスタイルを変えつつある。

ここ何年か、インドは中国からの激しい地政学的、地経学的な挑戦に直面してきた。二〇一七年のドクラムでの対立や二〇年のガルワンでの衝突の後、ヒマラヤ国境において軍事的な脅威が大きく高まったため、インドの外交政策は徐々に、だが慎重に、反中傾向を帯びるようになった。中国への反発はまた、アメリカへの接近、日本やオーストラリアとの関係強化、そしてヨーロッパや中央アジア諸国との結びつきを含めた、インドの多面的で指向的な外交によって強められている。最も重要なのは、日米豪印の戦略対話（クアッド）——中国はこれを反中のなアメリカの道

スウェーデン安全保障開発政策研究所
ストックホルム南アジア・インド太平洋問題センター長
ジャガンナート・パンダ

Jagannath Panda 印ジャワハルラール・ネルー
大学国際関係学部東アジア研究センター博士号取得、専門は中国政治、インドおよびインド太平洋の国際関係。オランダのハーグ戦略研究センターでシニア・フェローを務める。著書に *China-India Relations*, Routledge, 2016, *India and China in Asia: Between Equilibrium and Equations*, Routledge 2019, など。

具と見なしている——のようなインド太平洋におけるインドタイプにインドが積極的に参加したことで、インドの外交政策が中国に敵対的なものへと転換を遂げたというナラティブがいっそう強調された点である。

同時にインドは、急増する二国間貿易や気候変動問題における立場の一致、そして中国が支配的な役割を果たす上海協力機構（SCO）や新興国のプラットフォームであるBRICS（ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカ）に関与することで示されているように、バランスを取る路線も放棄していない。インドがこの地域における包摂

性を求めていることは、これまで通り競争や対立と協力の間で均衡が保たれることを示唆する。

しかしインドの戦略サークルは、中国がもはや「平和的台頭」を進める存在ではないことをよく認識している。そこで、ヒマラヤ国境やインド洋地域における中国の好戦的な振る舞いが続くために、インドもそれに応じて外交戦術を展開してきた。アルナーチャル・プラデーシュ州東部における最近の小競り合いは、不運にも長期的な現象となり、政策形成にも大きな影響を及ぼすなど、相互の不信感を象徴している。実効支配線（LAC）に関する認識の差異に加えて、中国がこの問題の解決にまったく関心を示さず、積極的な対応を拒んでいるために、国境紛争が激しくなり、インドは中国に対して強硬な姿勢——例えば国境紛争の解決なしに「正常化」はないと主張している——を取っているように見える。中国がインド太平洋（東シナ海、南シナ海、台湾海峡、ラダック）における領土拡張で粗野な態度（例えば「サラミ戦術」やグレーゾーン事態）を取っていることをますます認識して、インドの政策が直面する課題は増えているのである。

このような不透明な状況で、今後数年で中国が大国としての地位を追求することによって生じる課題に、イン

ドがどのように対処するか検討することは有益である。二〇二三年以降のインドの外交政策の傾向に、中国はどのように影響するのだろうか。

発展的パートナーから継続的な脅威へ

疑いなく、インドと中国の関係が緊張している主たる理由は、両国間の国境紛争である。二〇二〇年に起きたガルワンでの衝突以降、その対立が地域政治、国際政治の最前線に持ち込まれた。

さらに、国境の東部における緊張もまた、近年のアルナーチャル・プラデーシュにおける衝突にみられるように、長きにわたり懸案となっている。LACをめぐるセンシティブな問題であり、将来にわたっても長きにわたり主要な懸案であり続けるだろう。

しかし、ナレンドラ・モディ首相と習近平国家主席が政権に就いた直後には、彼らが「より緊密な発展的パートナーシップ」と呼んだ構想に基づいて、両国関係を安定させようとする「失われた機会」があった。だがこれはうまくいかず、国境紛争のような諸懸案に関して共通点を見出すには程遠かった。習近平が覇権主義的な野心を持ち、当時のインドもより断固とした姿勢で野心的な外交政策を取りつ

つあったので、モディも中国に妥協できなかつたからである。実際、インドを中国と対等なパートナーにするために、モディはブラグマティックな対中政策によって、二国間と地域的なレベルにおいて、中国との力の均衡を実現しようとした。

それにもかかわらず、二〇一八年に武漢、一九年にマハーバリプラムで開催された習とモディの「非公式な」首脳会談は、一見したところ関係改善に期待が持てそうな傾向にあった。ところが、二〇年初めに新型コロナウイルスのパンデミックが始まり、六月にガルワン渓谷での衝突が起きると、このような会談でどこもなく模索されていた信頼は失墜し、関係正常化への道も閉ざされた。不和を示す最近の数々の兆候も、中国がインドに対する差し迫った重大な脅威になっているという認識の強まりを助長している。

もう一つの重大な関心が寄せられている事柄は、インド洋——いくつものチョーク・ポイントを抱え、伝統的にインドが拠点を構えている地域——における中国の影響力が拡大していることである。中国が提唱する「海のシルクロード」をめぐって、安全保障上のリスクが高まっている。例えば、中国がインド洋地域においてハブ機能を持つものを含めて複数の港湾を戦略的に建設していることは、現状を

揺さぶり、インドの影響力を脅かしている。同様に、インドは「一带一路」(BRI)が地域の安全を脅かす「一方的な」行動であるとして、これを拒否している。なかでも、中国とパキスタンを結ぶ経済回廊にインドが懸念を持っているからである。

このような展開によって、インドは「指向性のある連携」と呼ぶのがふさわしい外交政策上のアプローチを取ることと迫られている。特定の分野において、特定の国と特定のパートナーシップを結ぶのである。この戦略においてインドは、クアッドとの協力を成功させ、さらにクアッド諸国との二国間の協力関係も促進させており、同時にグローバルなレベルでもさまざまなパートナーと連携を進めていることは、重要な意味を持つ。インドがインド太平洋において、このようなより強固な仕組みの構築を渴望していることは、この地域に対する長期的な展望において、決定的に重要である。もともと、皮肉なことに、同じく戦略的に自立的なアプローチから、インドは中国の修正主義的な行動に対しても「選択的支持」を与えている——SCOやアジアインフラ投資銀行(AIIB)には参加したが、BRIは拒否している。

特に、二〇二二年末に、「戦狼」外交官として有名で、

習近平の信任も厚い秦剛駐米大使が外交部長に任命されたことは、習近平が攻撃的な統治スタイルを継続するつもりであることを強く示唆している。一〇月初めの中国共産党第二〇回党大会では、中央委員会常務委員をはじめ、習近平に忠実な幹部だけが任命や昇進を勝ち取ったことで、中央軍事委員会を含めたさまざまな政策や人事の決定過程における彼の立場は盤石となった。このような行動はインドの恐怖心と反中傾向を高めることになり、同国の外交政策において中国が永続的な敵国の役割を果たすようになるだけなのである。

台頭するユーラシアとインド太平洋を越えた大戦略

インド太平洋に対するインドの多面的な関与は、二国間や三国間、あるいは小規模な多国間、ASEANや太平洋島嶼フォーラムのような機関によって地歩を築いている。そして現代の地政学で関心を集めているもう一つの地域は、中央アジアを含むユーラシアである。主な理由は、一帯一路（特にシルクロード経済ベルト）を通じて中国がこの地域における影響力を高め、ロシアがそれへの接近を加速させていることである。エネルギーを含む天然資源へのアクセス、貿易と投資の強化、連結性の強化、地域の安定

などが、インドが（主に長年にわたる「中央アジアとの連結」政策を通して）この地域に手を差し伸べている要因である。

こうして、インドはロシアやカザフスタン、キルギスのような国々との関係を通じて、またSCOや集団安全保障条約機構のような地域フォーラムを通じて、ユーラシアへの関与を強めようとしてきた。これは、ユーラシアに対して巨大な地政学的含意をもたらしたロシアのウクライナ侵攻後には、いっそう重要になった。インドのロシアに対する姿勢は、しばしば「沈黙外交」のレッテルを貼られるが、部分的にはユーラシアの地政学を中国とロシアが支配することへの恐怖心に影響されている。インドと中国の対立における「多国間のバランス」であり、中央アジア地域への出入り口でもあるロシアとの関係を悪化させないことは、中国に対する一定の安定を保証するのである。

インドにとってユーラシアとの連結は、イランとの関係を再構築するためにも重要である。イランの中国への傾斜を弱めるのと同時に、イランはユーラシアにおける一帯一路の影響力に対抗するインフラ計画「南北輸送回廊」（INSTC）におけるパートナーである。

全体として、インドの外交政策はますます相互に結びつ

いて競争的になっている世界において、ユーラシアとインド太平洋の両方が自国にとって経済的、戦略的な関心から重要であることを認識して、両者の間でバランスを取ろうとしてきた。このような外交政策は、インドの対中関係において重要な要素であり続けるだろう。

インドは中国の修正主義と決別するか

習近平による「中国の夢」の追求が地域の安全保障に対する重大な挑戦となる中で、アメリカや日本、オーストラリア、欧州連合（EU）およびその加盟国、そして最後に加わった韓国など、国際社会における民主主義的なアクターは、インド太平洋地域に対するそれぞれのビジョンを接合している。

このことは、軍事的な手段によって地域の現状に挑戦する努力を加速させている中国の意図をさらに強めている。すなわち、国連や世界銀行といった多国間機構における中国の影響力を拡大し、SCOやAIIIBのような代替となる制度とフォーラムを促進することによって、アメリカが率いる既存の世界秩序の根本的な構造を変えろという究極的な目標に向けて邁進させる勢いを中国に与えているのである。

同時に、中国が覇権主義的な行動を加速させていることで、地域の安全保障におけるインドの重要性が増している。この地域の地政学においては、依然として米中対立が最も影響力のある要因だが、インドと中国の対立が地域のバランスを敵対的な方向に大きく傾けていることも、同じくらい重要である。インドと中国はともに、アジアとインド太平洋における安全保障や安定において、最も優位な地位を占めたいと考えている。

しかし、このような目標に対する両国のアプローチは大きく異なる。中国はインド太平洋という構造そのものに敵対的である。曰く、それは「分断的」かつ「対決的」で、「アジア太平洋の名前を消そう」とする「時代遅れ」の冷戦期の政策だと主張している。他方でインドは、公式には「自由で開かれた」インド太平洋戦略を発表していないけれども、インド太平洋海洋イニシアティブや地域のすべての人々のための安全保障と成長を目指すなど、「包括的な」イニシアティブとイデオロギーを提示している。

さらに、国境紛争——その激化はインド太平洋における報復あるいは代理的行動と見なすことができる——だけでなく、東シナ海と南シナ海における中国の行動は、インドのパートナー国（特に日本）およびインド自身の地政学的

な利益——資源へのアクセスと、石油の採掘や航路のための航行の自由原則の維持——を脅かしている。中国はこの地域のさまざまな国でのインフラ事業に、BRI経由のものも含めて莫大な投資を行っている。中には、軍事目的で利用でき、中国に戦略的な利益を与える可能性があるために、インドの懸念を招いているプロジェクトもある（例えばスリランカのハンバンタ港）。

さらに、中国がさまざまな国々に軍事施設を設置し、軍艦や航空機などを配備していることを含めて、インド太平洋における軍事的プレゼンスを継続的に強めていることは、今や海警法によって法的に裏付けられた。これは、潜在的にはインドの安全保障とインド洋地域における影響力を脅かし得るので、インドにとって懸念材料である。

同時に、この地域においてインドやそのパートナー国が、これまでより多くの海上演習を実施して、能力を発展させる必要性が高まっている。中国とはいえば、東シナ海およびその周辺で防空識別圏に侵入するなど、報復行為を行っている。同様に、中国が海軍力の増強と軍事力の近代化を進める中で、AUKUS（豪州・英国・米国）のような軍事同盟が安全保障協力の水準を高める一方で、インド太平洋諸国の間での軍備や艦船の開発競争は長く続いている。

同時に注目すべきは、インド太平洋諸国の間での中国に対する認識が共有されているにもかかわらず、アメリカや日本、オーストラリアのようなインドと「理念を共有する」パートナー国の中で、中国への対決姿勢や強度が異なることである。すべてのクアッド諸国が、中国がますます攻撃的になっていると認識しているとしても、最近アメリカの二つの同盟国、すなわち「大胆かつ歴史的な」防衛政策を新しく打ち出した日本とオーストラリア（後者の場合は、重要なことにアメリカやイギリスとのAUKUSを通して）は、アメリカの「対中封じ込め」路線に前のめりに協力している。他方でインドは、依然として「対中管理政策」によっている。

それにもかかわらず、インドが修正主義国家である中国に対して、伝統的に二元的な（大国間競争）アプローチを取ってきた姿勢は、異なる展開を見せるかもしれない。それは、国家安全保障および地域の安全保障における現状維持に対して長期にわたり存在し、あるいは新たに生じている本格的な脅威への対応に基づいている。直接的な紛争が続けば、インドは中国の修正主義を公に非難することになるだろう。そうなれば、恒久的な和解への希望は、不可逆的に潰えるだろう。●

（翻訳・谷一巳）